

宿世と違目

——源氏物語の女君たちの生きる力をめぐって——

瀬戸 宏太

副題に記した「生きる力」は、源氏物語研究の術語ではない。この語を冒頭に掲げてみたのは、源氏物語を捉えるためのキーワードと考えたからではなく、教育の現場において、頻りに耳にするようになった語彙だからである。

それはおそらく、「生命力」というような熟語に置き換えることを拒むような思い入れをもって使われていよう。単なる知識・技術の伝授に終始するのではなく、みずからの人生を進んで切り開いていくような力を授けることが教育の目標なのだ、例えばそんな風に要約してみることが出来ようか。無論、これを理想として掲げることに異論のあるはずもない。

とは言え、それが具体的にどのようなように獲得される能力であるのかは、あるいは、何をもってそのような能力を身につけたと見ることが出来るのかは、必ずしも自明ではないのではないか。本稿ではそうした問題意識を前提としつつ、しばらく源氏物語の女君たちを「生きる力」という観点から見直してみたいと思う。熾烈な運命を課せられた彼女たちは、どのように物語世界を生き抜いていくべく位置付けられているのか。もとよりそれが、ただちに現代的な意味での「生きる力」を具体化する手掛かりになると考えるほど安直ではないつもりだが、しかし、この物語の抱える奥行きに改めて目を向けることで、これを柔軟に考えなおしていく糸口にはなるかと、期待したのである。

1 宿世という人生観

源氏物語の女君たちを「生きる力」という観点から捉えようとするのは、もしかすると奇異なことと感ぜられるかもしれない。彼女たち、平安時代の女性たちには、みずから人生を切り開いていくというよりは、課せられた運命に翻弄されていくという印象の方が強いからである。

今、そうした彼女たちを象徴するのに、「宿世」という語を掲げることは、ある程度許されるであろう。もとは仏教語で、使われ方によって「運命」とも「縁」とも置き換えられるが、いづれにせよ、自身のあざかり知らぬ力の作用した結果として、人生を捉えようとする言葉である。先回りして言うておくなら、彼女たちにとって、かような捉え方が過酷な人生を甘受する方便になっていた可能性は高いと思う。不本意な事態を、自身の在り方とは無関係に当てがわれたものと理解することで、かろうじて納得していく姿勢とも言えようか。例えば、そんな女君の典型として、空蟬をあげることが出来ると思う。

A 目も及ばぬ御書きざまも霧りふたがりて、心得ぬ宿世うち添へりける身を思ひつづけて臥したまへり。

(帚木1 一〇七頁)

B とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に心づきなくてやみなむと思ひはてたり。

(帚木 1 一一一頁)

C 女君、心憂き宿世ありて、この人にさへ後れて、いかなるさまにはふれまどふべきにかあらむと思ひ嘆きたまふを見るに、命の限りあるものなれば、惜しみとどむべき方もなし、いかでか、この人の御ために残しおく魂もがな、わが子どもの心も知らぬを、とうしろめたう悲しきことに言ひ思へど、心にえとどめぬものにて、亡せぬ。

(関屋 2 三三六―三四頁)

D いとあさましき心の見えければ、うき宿世ある身にて、かく生きとまりて、はてはてはめづらしきことどもを聞き添ふるかなと人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで尼になりにけり。

(関屋 2 三三六―三四頁)

源氏の思いがけない接近につけ(A)、その彼を拒絶するにつけ(B)、また、夫の伊予介の死に際しても(C)、継子の紀伊守を厭うに当たっても(D)、彼女の心中には「宿世」の二文字が去来する。喜んで納得できる筈もない諸々の事柄を、自身の「宿世」と認めることで受け容れようとするのである。事態を改善しようとするよりは、不本意を諦めることに重きがあるという印象でもある。

無論、源氏の若い情熱に流されずに、これをはねつけていくことは、一つの決断であったには違いない。だが、伊予介以外に後ろ盾

のない彼女の立場を考えるなら、その決断は手堅いが、それゆえに主体的な印象に乏しいと言わなければならない。また、出家することも、みずから進んでした判断であった筈ではあるが、結果的に源氏の庇護下におさまることになったのを見ると、彼女が人生を切り開いたとまでは感じられない。むしろ、自身の力では如何ともし難い状況下において、自己否定に陥るのではなく、なおしたたかに生き延びていくための手掛かりとして、自身の慮外に不本意な「宿世」が嘆じられていると見たいのである。

繰り返すようだが、おそらく、こうした感覚は空蟬に固有のものではなかったと思う。程度の差こそあれ、それは平安時代の女性たち一般的にあった生きる知恵ではなかったか。ここで空蟬を「典型」として取り上げた所以でもある。しかし、この物語において、空蟬のような思考が平均的に繰り返されているのかというと、実はそうではない。すなわち、不本意な事柄をただちに「宿世」と理解することが彼女たちの「生きる力」であったというような単純な図式では、物語世界を一般化しきれないということである。

もう少し丁寧に考えていく必要があるわけだが、そこで次に空蟬と同じく、その思念に「宿世」の語が多く現れる藤壺に目を向けてみたいと思う。

E 暑きほどはいとど起きも上がりたまはず。三月になりたまへば、いとゆるきほどにて、人々見たてまつりとがむるに、あさましき御宿世のほど心憂し。人は思ひよらぬことなれば、この月まで奏せさせたまはざりけることと驚ききこゆ。わが御心ひとつには、しるう思ひ分くこともありけり。

(若紫 1 一三三―一三頁)

F けはひしるくさと匂ひたるに、あさましうむくつけう思されて、やがてひれ伏したまへり。「見だに向きたまへかし」と心やましうつらうて、ひき寄せたまへるに、御衣をすべしおきてみざり退きたまふに、心にもあらず、御髪を取り添へられたりければ、いと心憂く、宿世のほど思し知られていみじと思したり。

(賢木2 一一〇—一頁)

G 入道の宮にも、春宮の御事により、思し嘆くさまいとさらなり。御宿世のほどを思すには、いかが浅く思されん。

(須磨2 一九一頁)

源氏との子を身籠ったと知って(E)、また、桐壺院の崩御後に源氏の接近を許すこととなって(F)、そして源氏が須磨に流離するという事態に直面して(G)、藤壺の思念にも空蟬と同じく「宿世」の語がしきりと明滅する。とは言え、彼女の場合、その思念がそのまま自分に降りかかった事態への対処に直結するという流れには必ずしもなっていないことを、まずは指摘しておけようか。落飾一つをとってみても、憂き宿世だから出家するというのではなく、源氏に自覚を促す手段として、さまざまな事情を勘案しながら選びとられていた筈だ。その限りにおいて、藤壺はみずから人生を切り開いていく女君であるという側面を強く持っているとも言える。

ただ他方、それが「宿世」として目下の事態を受け容れることから出発していたことにも、改めて目を向けたいのである。源氏との二人三脚で皇子の御代を実現していく彼女の姿には、時に反省のないことが指摘されるが、それも自己否定を回避する装置

として「宿世」が機能しているからだと思われよう。藤壺の「生きる力」は、空蟬とは異質ながら、「宿世」と深く結びついている。けれど、彼女の最期の述懐も、こうした観点から、その重さを測りなおすことが出来るのではあるまいか。

H 御心の中に思しつづくるに、高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心の中に飽かず思ふことも人にまさりける身、と思し知らる。

(薄雲2 四四五頁)

ここで顧みられる彼女の「宿世」は、「憂き宿世」ではなく「高き宿世」である。さまざまな試練があったとは言え、破綻することなく女院として人生を全うしつつあるのだから、当然と言えば当然であるが、さればこそ、それが手放しの充足感として想起されているのではなく、これと比肩するものとして「心に飽かず思ふこと」がせり上がってくる機制に注意したいのである。おそらくそれは、幸せに見える人生にも苦難があるものなのだというような一般論に、横すべりさせるべきものではない。そうではなく、「宿世」の語で把捉しきれないような困難な事象を、「宿世」と同等な、あるいは同質な事柄として扱直しているところに要点があると思うのである。言い換えるなら、自身の人生を「宿世」とする捉え方に支えられるようにして、不本意な現実に向かうことが可能になっているのではないかということだ。藤壺が、得体の知れぬ運命に翻弄されたことは疑うべくもない。ただそうした才覚が、「宿世」という、一見受動的な人生観を手掛かりとしながら発動せられていることを

強調しておきたいのである。

このように考えてくるとき、夙に指摘されているように、この述懐と相似的なものとして紫上の思念が描かれていることにも、改めて注目できようか。

I げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな

(若菜下4 一一二頁)

実は、前二者の女君と違って、紫上の心中に進んで「宿世」の語が浮かぶことはほとんどないと言って良い。右の場面も、直接的には源氏が彼女の人生を優れた宿世であると言ったことに触発されたという体のものである。だがそれが、結果として藤壺の述懐と近似してくるのを目にする時、紫上と藤壺との外見上の類似が、源氏の寵愛という点からだけ求められていたのではなく、藤壺的な人生への向かい合い方を引き継ぐ存在として紫上があったことの、比喩としても見えてくるのではないかと思うのである。

藤壺も紫上も、決して運命に流されるだけではない、時代を越えて共感される資質を備えた女君だ。だが、そんな源氏物語の柱ともいべき二人の女君が、かように「宿世」との関係の中で、自身の人生と渡り合う力を得ていると見えることの意味は、軽くないと言わねばであらう。

2 女君たちを圍繞する宿世

源氏物語の中に、自身の人生を「宿世」と捉えることを支えとして、逆にそれを切り開いていく力を得ようとする発想が潜んでいることを見えてきたつもりである。だがこれを、単純にこの物語の独創と考えたのでは、かえって事の本質を見失うと思う。「宿世」という観念は、女君たち自身の心中に浮かぶべきものであったという前に、彼女たちを取り囲む語として日常化していたのではないかと考えるからである。

平安時代の女性たちが課せられた運命に翻弄されているかと思えるのは、そもそも彼女たちの人生が、他ならぬ自分だけのものとして完結していないからであらう。親やその一族にとって、あるいは周囲に仕える女房たちにとって、娘や女主人の命運は自身の生活を左右するものであった。その「宿世」が関心事となるのは自然なことであった筈である。この物語においても「宿世」の語は、当人の意識以上に周囲の思いの中に現れる。たとえば、源氏と政治的に競り合う内大臣(頭中将)が娘の「宿世」を意識したり、宇治の姉妹の女房たちが頼りと女主人の「宿世」を取り沙汰したりするのは、彼女たちが運命共同体であればこそであらう。無論そこに、例えば朱雀院の女三宮に対する婿選びの場合と同じく、純粹に女君の将来を案じる思いがないとは言えまいが、しかしその朱雀院においてすら、「宿世」を持ち出すのには皇家の行末に対する矜持が表裏しているように感じられる。

かように平安時代の女性たちは、その個性や出自の如何に関わらず「宿世」に圍繞されていたのであり、その彼女たちが自身の人生を「宿世」と結びつけて意識するのは、半ば当然であらう。前

節に検討してきた女君たちが「宿世」を意識しつつ自身の人生と向かい合うのも、こうした環境の自然な延長線上にあると見るべきである。逆に言えば、そこにどのような連関を構築していくかに、彼女たちの個性が浮かび上がってくるとも見られようか。ここではそうした観点から、引き続き明石君と落葉宮の場合の「宿世」について検討していきたいと思う。

まずは明石君を取り囲む「宿世」である。

J 『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとり
にこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし
遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に
遺言しおきてはべるなる

(若紫1 二〇三―四頁)

K 世に知らず心高く思へるに、国の内は、守のゆかりのみこそ
はかしこきことにすめれど、ひがめる心はさらにさも思はで年
月を経けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふや
う、(入道)「桐壺更衣の御腹の源氏の光る君こそ、朝廷の御か
しこまりにて、須磨の浦にもしたまふなれ。吾子の御宿世に
て、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるといふに、この君
に奉らむ」と言ふ。

(須磨2 二二〇頁)

源氏の供人たちの噂話の中に登場した最初から、明石入道は娘の明石君の「宿世」を強く意識する父親であった(J)。それは源氏の須磨流離に伴い、具体的に物語の中に姿を表した時にも変わって

いない(K)。かような父の許にあって、明石君が自身の「宿世」を顧みようとするところがあるのは、少しも不思議でない。だがそれは、偏屈な父の「宿世」に比べると、ごく常識的という印象も受け

L 「誰が詣でたまへるぞ」と問ふれば、「内大臣殿の御願はたしに詣でたまふを知らぬ人もありけり」とて、はかなきほどの下衆だに心地よげにうち笑ふ。げに、あさましう、月日もこそあれ、なかなか、この御ありさまをはるかに見るも、身のほど口惜しうおぼゆ、さすがにかけ離れたてまつらぬ宿世ながら、かく口惜しき際の者だに、もの思ひなげにて仕うまつるを色節に思ひたるに、何の罪深き身にて、心にかけておぼつかう思ひきこえつつ、かかりける御響きをも知らで立ち出でつらむ、など思ひつづくるに、いと悲しうて、人知れずしほたれけり。

(濔標2 三〇二―三頁)

源氏の帰京後、彼が大きな一行を引き連れて住吉に願ほどきに訪れたのと偶然出くわした場面である。その偶然に「かけ離れ奉らぬ宿世」を感じながらも、事前にそれと知ることのなかったことに、彼我の懸隔を痛感するというのであろう。それは、娘の「宿世」に賭した父の執念を引き継ぐというよりは、むしろ「高き宿世」と対置して自身の人生の難事を噛みしめようとした、藤壺や紫上の思念に近似すると言ふべきではあるまいか。事実、彼女が以後、「宿世」よりも「身の程」を意識することによって、みづからを律していくことは、これまでも繰り返し指摘されてきたことである。ここはそうした未来を暗示する場面であるとも言える。

だが、それでは、父が抱いた強烈な「宿世」への思いが、明石君にとって自身の人生に向き合っていくためのきっかけに過ぎなかったかと言うと、違うのではないか。源氏との間に儲けた姫君が、入内し明石女御となって懐妊し、いよいよ出産の時が近づいてきたという、次のような場面に注目したい。

M 陰陽師どもも、所をかへてつつしみたまふべく申しければ、外のさし離れたらむはおぼつかなしとて、かの明石の御町の中の対に渡したてまつりたまふ。こなたは、ただ大きな対二つ、廊どもなむ廻りてありけるに、御修法の壇ひまなく塗りて、いみじき験者ども集ひてののしる。母君、この時にわが御宿世も見ゆべきわざなめれば、いみじき心を尽くしたまふ。

(若菜上4 一〇三頁)

ここで明石君が見定めようとする「わが御宿世」は、明石入道が夢想した娘の「宿世」と完全に重なり合っている。ここに到って、明石君の「身の程」を自覚した生き方が、父から自身の娘にまで続く、親子三代に渡っての「宿世」の実現という目的に支えられていたことが見えてくる。いや、目的に収斂させる形で彼女の人生を語るのには、いささか不穏当であろうか。だが少なくとも、父によって見据えられた「宿世」が、身の程意識によりながら物語世界を生き抜いてきた彼女の、力の源泉として作用していたとは認めて良いと思うのである。

もとより、成功者の人生から成功の秘訣を指摘するのは容易い。そういう意味で、明石君の「生きる力」に「宿世」が関わっていると見るのは、結果論に過ぎないとも言える。では、そうした勝者の

側にいるとは言えない女君においてはどうかだろうか。その事例として、落葉宮に目を向けてみることにしたい。

N まいて、言ふかひなく、人の言によりていかなる名をくたさましなど、すこし思し慰むる方はあれど、かばかりになりぬる高き人の、かくまでもすずるに人に見ゆるやうはあらじかしと宿世うく思し屈して、夕つ方ぞ、(御息所)「なほ渡らせたまへ」とあれば、中の塗籠の戸開けあはせて渡りたまへる。

(夕霧4 四二二頁)

夕霧の接近を許すことになった後の場面である。こうした時に否定的な「宿世」を意識するという図式は、先に見てきた空蟬や藤壺と同じであり、類型的な発想と言えるであろう。だが、そこから直ちに彼女が事態を諦めて受け容れる方向に進んだかと言えは、そうではない。何故、そうなるのか。とかく夕霧の、恋の主人公には似つかわしくない性格の責任に帰せられがちな展開が待っているわけだが、ここでも、その「宿世」の位置づけから考え直すべき面があるのではないかと思う。この後の一条御息所との対話で、彼女に向かって「宿世」の語が繰り返されることに注意されるからである。

O 今さらにむつかしきことをば聞こえじと思へど、なほ、御宿世とはいひながら、思はずに心幼くて、人のもどきを負ひたまふべきことを。とり返すべきことにはあらねど、今よりはなほさる心したまへ。数ならぬ身ながらも、よろづにはぐくみきこえつるを、今は、何ごとをも思し知り、世の中のとざまかうざまのありさまをも思したどりぬべきほどに、見たてまつりおき

つること、そなたさまはうしろやすくこそ見たてまつりつれ、なほいはいはけて、強き御心おきてのなかりけることと、思ひ乱ればべるに、いましばしの命もとどめまほしうなむ。ただ人だに、すこしよろしくなりぬる女の、人二人と見る例は心憂くあはつけきわざなるを、ましてかかる御身には、さばかりおぼろげにて、人の近づききこゆべきにもあらぬを、思ひの外に、心にもつかぬ御ありさまと、年ごろも見たてまつり悩みしかど、さるべき御宿世にこそは。院よりはじめてたてまつりて思しなびき、この父大臣にもゆるいたまふべき御気色ありしに、おのれ一人しも心をたててもいかがはと思ひ寄りはべりしことなれば、末の世までものしき御ありさまを、わが御過ちならぬに、大空をかこちて見たてまつり過ぐすを、いとかう人のためわがため、よろづに聞きにくかりぬべきことの出で来添ひぬべきが、さても、よその御名をば知らぬ顔にて、世の常の御ありさまにだにあらば、おのづからあり経んにつけても慰むこともやと思ひなしはべるを、こよなう情けなき人の御心にもはべりけるかな

(夕霧 4 四三五―六頁)

母親の視点から落葉宮の人生を、現在においても過去においても「宿世」として納得しようとしつつも、なお無念の思いがにじみ出てくるという体であろう。けだし、かように母の側から捉えられた「宿世」が、落葉宮に先回りして、彼女が「宿世」という観念の中に逃げ込み、人生を諦めるべきものとして受け容れることを妨げようとしているとは見られまいか。

無論、直接には、その母の死を招いた張本人としての夕霧に対する

る反発が、落葉宮の抵抗を呼び起こしてはいるのだろう。ただ、彼女の置かれた立場を現実的に考えるなら、その抵抗自体は子供じみた反抗と見えなくもない。にもかかわらず、それを彼女の掛け替えのない生き方として支えるかのように、母親が見据えた娘の「宿世」があったのではないかと思うのである。

明石入道と一条御息所と、両者が娘に見た「宿世」は、規模も性格も大きく異なっている。だが、そうした周囲の把握した「宿世」が、当人が主体的に人生へ対峙していく支えになっているという意味で、共通したパターンを見出せるのではないか。物語は一見、受動的な生き方を女君たちに強いるべく「宿世」を持ち出してくるかのようにありながら、逆にそこから、彼女たちの「生きる力」を引き出してくる構図を持っていると見たいと思う。

3 生きる力の不足と違目

源氏物語の中の女君、あるいは平安時代の女性たちに、現代のように主体的に人生を選びとっていく自由は、あまりなかったと考えが良いのだと思う。それゆえ彼女たちの生き方は、遠目には運命に身を委ねるしかないものであったかのような印象を与えとも言える。しかし、仔細に見てみると、そうした受動的な人生を象徴するとも言える「宿世」の観念に寄り添いつつも、かえってそれにより、自身の人生と厳しく渡り合おうとする、それぞれに力強い生き方が潜められていたと、考えてきたことになる。

だがそれでは、この物語はそうした力強さにはばかり価値を見出すうとする世界であつたらうか。そうではあるまい。ここに登場する女君たちが、遠目に運命に翻弄されていると見えるということは、

それぞれに即せば力強さを感じとれるとしても、なお大枠では、力強さばかりでは評価しきれない女性の人生を見据えていると考える方が自然である。ここでは最後にそうした視点から捉えるにふさわしい人物として、浮舟について取り上げることにした。

彼女の人生がいかに位置付けられているかを考えるにあたって、「宿世」と並んで着目したい考え方に「たがひめ(違目)」がある。あらかじめ断っておいた方が良いかと思うが、無論、本来「違目」とは「宿世」と対にして考えるような語ではない。辞書的に言うなら、予想や期待との食い違いを指す言葉で、仏教語というわけでもない。だが、この物語においては源氏の運命と関わる形で使われることで印象的な語であったとも言えるのではないか。次のような具合である。

P 中將の君も、おどろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、
合はする者を召して問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋
のことを合はせけり。(占者)「その中に違ひ目ありて、つつし
ませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼ
えて、「みづからの夢にはあらず、人の御事を語るなり。この
夢合ふまで、また人にまねぶな」

(若紫1 一三三―四頁)

Q わが君孕まれおはしましたりし時より、故宮深く思し嘆くこ
とありて、御祈禱仕うまつらせたまふゆゑなむはべりし、くは
しくは法師の心にえさとりはべらず。事の違ひ目ありて、大臣
横さまの罪に当たりたまひしとき、いよいよ怖ぢ思しめて、
重ねて御祈禱どもうけたまはりはべりしを、大臣も聞こしめし

てなむ、またさらに言加へ課せられて、御位に即きおはしまし
しまで仕うまつることどもはべりし。

(薄雲2 四五―頁)

自身の血を引いた皇子が帝位につくという抜きん出た宿運に対し、
それにふさわしからぬ事態の出来が「違目」と捉えられている。そ
れは「宿世」の如何だけでは説明きれない事柄を、把握し直す概念
として用いられていると言うべきだろう。その「違目」が、入水後、
生還した直後の浮舟に対して使われていることが注目されるのであ
る。

R げにいと警策なりける人の御容面かな。功德の報いにこそか
かる容貌にも生ひ出でたまひけめ。いかなる違ひめにてかくそ
こなはれたまひけん。もし、さにや、と聞きあはせらるること
もなしや

(手習6 一九三頁)

発言者の僧都の意識に即すなら、発見のされ方や、その後の正体
のない様子が、そぐわないように見える女性だと評しているに過ぎ
ないのかもしれない。だが「違目」が、この物語においては源氏の
巨大な宿運と関わって用いられることのあった語であることを思い
起こす時、かように運命に弄ばれるようにしてここに辿り着いた浮
舟の人生の全体にも、改めて思いを馳せたくなる。現状が「違目」
であるとするならば、浮舟の「宿世」とはどのようなものなのか。
物語を遡ることにしよう。入水の前、薫と匂宮との三角関係に窮
した浮舟もまた、「宿世」を嘆じる女君であった。

S この人々の見思ふらむことも、いみじく恥づかし。わが心もてありそめしことならねども、心憂き宿世かなと思ひ入りて寝たるに、侍従と二人して、(右近)「右近が姉の、常陸にて二人見はべりしを、ほどほどにつけてはただかくぞかし、これもかれも劣らぬ心ざしにて、思ひまどひてはべりしほどに、女は、今の方にいますこし心寄せまさりてぞはべりける。それにねたみて、つひに今のをば殺してしぞかし。さて我も住みはべらずなりにき。国にもいみじきあたら兵一人失ひつ。また、この過ちたるもよき郎等なれど、かかる過ちしたるものを、いかでかは使はんとて、国の内をも追ひ払はれ、すべて女のたいだいしきぞとて、館の内にも置いたまへらざりしかば、東国の人になりて、ままも、今に、恋ひ泣きはべるは、罪深くこそ見たまふれ。ゆゆしきついでのやうにはべれど、上も下も、かかる筋のことは、思し乱るるはいとあしきわざなり。御命までにはあらずとも、人の御ほどほどにつけてはべることなり。死ぬるにまさる恥なることも、よき人の御身にはなかなかはべるなり。一方に思し定めてよ。宮も御心ざしまさりて、まめやかにだに聞こえさせたまはば、そなたさまにもなびかせたまひて、ものないたく嘆かせたまひそ。瘦せおとろへさせたまふもいと益なし。さばかり上の思ひいたづききこえさせたまふものを、ままがこの御いそぎに心を入れて、まどひるてはべるにつけても、それよりこなたにと聞こえさせたまふ御事こそ、いと苦しくいとほしけれ」と言ふに、いま一人、「うたて恐ろしきまでな聞こえさせたまひそ。何ごとも御宿世にこそあらめ。ただ、御心の中に、すこし思しなびかむ方を、さるべきに思しならせたまへ。いでや、いとかたじけなく、いみじき御気色なりしかば、人の

かく思しいそぐめりし方にも御心も寄らず。しばしは隠ろへても、御思ひのまさらせたまはむに寄せたまひねとぞ思ひえはべる」と、宮をいみじくめできこゆる心なれば、ひたみちに言ふ。

(浮舟6 一七九―八〇頁)

だが、これまでに見てきた女君たちと違い、彼女にとってそれは、物語世界に生き延びていくための心の装置とはならなかった。それどころか、その「宿世」の観念をもって、かえって周囲の女房たちに追い詰められる始末である。その理由を性格や資質に帰するならば、浮舟は「生きる力」に乏しい女性であったということになるのだろう。彼女が全体として醸す、はかなげな印象は、そうした理解の仕方を補強しているとも言える。

しかし翻って、この浮舟の嘆じる「宿世」が、いかに彼女を救うべく機能しえたのかと問い直してみることも出来るのではないか。薫の庇護下でありながら匂宮の情熱にほだされる彼女の姿は、考えてみれば、先に見た空蟬の現実的な生き方の対極にあると見られよう。さればこそそれは、歌物語の女主人公などに類型的とも言えるわけだが、そこに「宿世」の観念を持ち込んだところで、事態を現実的に受け容れなおす余地などなかったということではないか。言わば「宿世」を支えとして自身の人生と向かい合うという、この物語がこれまで持ち込んできた方法自体が、限界に突き当たっていると思えるのではないかと思ふのである。

事実、源氏物語における「宿世」の語の用例の最後は蜻蛉巻に出てくるものであり、浮舟の生還後を描く手習巻以降には見えない。逆に言えば、その手習巻にあって生還した当初の浮舟の姿が「宿世」

ではなく「違目」と捉えられていたことは、最早「宿世」という説明すら寄せ付けられないものとして、彼女の人生がありのままに読者の前に投げ出されようとしていることを象徴していたかとすら思われってくる。熾烈な運命を課せられた女君たちを力強く生き延びさせていく中で、さまざまに彼女たちの「宿世」と格闘してきた物語世界であればこそ、そこに深い思いが感じ取れよう。物語は、女性たちから自身の人生を切り開くべく「生きる力」を引き出しつつも、なおそれを彼女たちの自己責任に帰させようとはしなかったというところか。

最終的に落飾する浮舟の心中を、澄み切った境地などと評することはしたくないと思う。ただ、かように展開に従いながら見出してきた「生きる力」だけでは容易に組み伏しきれない世の中を、物語が澄んだ目で見据えようとするに到っていたとは、思われるのである。

注

- (1) 源氏物語本文の引用、および巻数・頁は、小学館新編『源氏物語』岩波書店より、私に傍線を付した。
- (2) 今西祐一郎「懺悔なき人々」『源氏物語覚書』岩波書店 平10・7
- (3) 阿部秋生「六条院の述懐」『光源氏論―発心と出家』東京大学出版会 平1・8